

文学分野

古代世界における学派・宗派の成立と〈異〉意識の形成
(VAADA:Virtual Ancient Arguments on Difference and Affinity)

メンバー

- 赤松明彦（京都大学大学院文学研究科教授・リーダー）
徳永宗雄（京都大学大学院文学研究科教授）
御牧克己（京都大学大学院文学研究科教授）
井狩弥介（京都大学人文科学研究所教授）
横地優子（京都大学大学院文学研究科助教授）
W・クノーブル（京都大学大学院文学研究科外国人教師）
宮崎 泉（京都大学大学院文学研究科COE研究員）
赤羽 律（京都大学大学院文学研究科COE研究員・研究会補佐員）
室屋安孝（日本学術振興会研究員）
野田智子（日本学術振興会研究員）
志賀浄邦（日本学術振興会研究員）
杉田瑞枝（京都大学大学院文学研究科OD）
佐藤直実（種智院大学非常勤講師）
納富信留（慶応大学助教授）
山田 篤（京都高度技術研究所情報メディア研究室長）
茂木秀淳（信州大学教授）
八木 徹（大阪学院大学教授）
黒田泰司（大阪学院大学教授）
山下 勤（京都学園大学助教授）
谷川泰教（高野山大学教授）
室寺義仁（高野山大学助教授）
狩野 恭（神戸女子大学教授）
A・アクルチカル（ブリティッシュ・コロンビア大学教授）
A・ヴェツラー（ハンブルク大学教授）
L・シュミットハウゼン（ハンブルク大学教授）
H・アイザクソン（ペンシルヴェニア大学助教授）

H・クラッサー (オーストリア科学アカデミー研究員)

P・バルセロヴィッチ (ワルシャワ大学・東洋研究所)

研究会の趣旨

古代世界において成立してきた哲学の諸学派 (school) や宗教的各派 (sect) の初期の成立史を文献資料に基づき検証する。諸言説の聖典・経典化のプロセス、伝統の形成過程、正統説と異端説の分岐、他者の見解の取り込みによる統合などといった観点から、テキストを読解し、その作業を通じて、学派・宗派の成立 - これは同時に<学>や<教>それ自体の成立の歴史でもある - のダイナミズムと、そこに見出される<異>意識の構造を明らかにすることを本研究会はその目的とする。当面は、主としてインド・チベット・中国というアジア世界を対象領域とするが、「学派の成立」を世界的に考察する上で欠かすことのできないギリシア世界については、学外から専門研究者の参加をえた。当面の研究対象としては、doxography (「諸学説集成」) の性格をもついくつかのテキストを選び、そこに働く「他者の見解」や「異端説」への意識・観念をまず分析することから始めたい。

研究会の活動としては、次の三本柱を計画している。

- 1) ハリバドラ (8世紀ジャイナ教の思想家) の『六派哲学集成』およびその注釈テキスト類を対象とした共同研究会。オンラインによる電子版校訂テキストとその訳注の作成と公開をめざす。
- 2) チベット宗義書研究の研究会。従来、御牧教授 (仏教学) によってすすめられてきた「チベット宗義書研究」の蓄積を基に、その成果の出版をめざす。
- 3) 「古代世界における学派・宗派の成立と<異>意識の形成」をテーマとする個別研究発表の場としての「学派研究会」。2ヶ月に一度の開催を予定する。

研究会の成果については、順次Newsletterや報告書を通じて公開していきたい。

本研究会の中心メンバーは、インド世界を対象とする研究者であるが、古来「多言語・多宗教・多民族」の世界であったインド世界の研究者が、「グローバル化」をテーマとする本COEプログラムに積極的に関わるの

は当然のことであろう。今日のグローバル化が、ともすれば越境・混成的な側面を持つものとして見られることが多いとするならば、古代インド世界の場合にも、確かにそのような現象（〈普遍〉の地域・土着化）を見出すことは容易であるのだが、そこでは、一方で必ず「〈特殊〉の正統・普遍への融合」= サンスクリット化の運動が見られたことはよく知られているところである。土着化とサンスクリット化という、この両方向の運動を、「学」の成立のプロセスの中にも探り、その具体的な姿を明らかにしようとするのが、本研究会の目指すところである。単なる文化相対主義は自文化中心主義へと容易に転換する。また、強大な力を笠に着た普遍主義の押し付けは帝国の再来でしかない。真の「グローバル化」は、正反対のベクトルをもった運動の絶えざる往復運動の場においてはじめて可能となるに違いない。本研究会は、このような多元的文化の未来の可能性についても検討の対象としたい。

なお、本研究会は、人文学分野におけるオンライン共同研究会の試みとして、その第一段階では、現行のネットワークシステムでも可能な、メーリングリストとホームページによる共同研究会を実施し、研究会を重ねる過程で、順次、次の段階への技術的発展、つまりXML文書によるファイルの作成、原文テキストの作成、訳注の制作、さらにWEB利用による議論・提案・修正などの複数意見のテキストへのタグ付き書き込み、それらをネットワーク上で同時に実現するシステムの試験的实施・改良・構築をも目指すこととする。

研究報告

1. 第1回研究会報告（要旨）

VAADA第1回研究会は、2003年1月25日（土曜日）に、京都大学文学部において開催されました。第1回目の研究会のため、研究会設立の経緯と趣旨について、研究会リーダーである京都大学大学院文学研究科・赤松教授よりお話がありました。その後、同教授より、「古代インド世界における『学派』の諸問題」について発表が行われ、その後、本研究会メンバーで、京都高度技術研究所情報メディア研究室長の山田篤氏が

ら、オンライン共同研究会システム構築について報告がありました。具体的な内容につきましては以下の通りです。

古代インドにおける〈異〉意識の問題
赤松明彦(京都大学大学院文学研究科教授)

本研究会は、古代世界の〈異〉意識を様々な観点から、また様々な分野において考察していこうとするものである。ここでは、故 W.Halbfass の *India and Europe, An Essay in Understanding* (New York 1988) に収められている論考 ‘Traditional Indian Xenology’ (「インドの伝統的異人観」) を参考にして、そのような研究をすすめる上での見取り図を提供したい。彼がここで使用する ‘Xenology’ という語は、「ある文化圏における異人・外国人に対する態度、ある文化圏で異人・外国人をどう観念するかということ」を表す用語である。Halbfass は、この論考を前後二段にわけている。前段(5--13)では「異人観」の理念的・イデオロギー的構造を、主としてサンスクリット文献に基づいて明らかにしようとし、他方後段(14--32)では、古代インド人の日常生活の場、社会的関係の中での「異人観」の実相を、文献のうちに探ろうとしている。本報告では、主として前段の内容に基づいて、「異人観」の構造を考える上での複数の視点を提示した。

Halbfass は、前段の論考においては、古代インドにおいて「異人」を表す語・概念として特に、*mleccha* (ムレツチャ) と *yavana* (ヤヴァナ) に注目して論じている。プラーフマナ文献以後、つまり紀元前800年以後における展開を中心にして、両語の用語上・概念上の違いを取り出すと、次のようなことが言える。

1. *yavana* は、どちらかと言えば記述的な概念である。特定のグループ(族)に属する者として、そのものたちの特徴を認知し、分類することへの関心が表れている。
2. *mleccha* は、強い価値判断と宗教的・禁忌的排除を含む語で、異人・他者を、基本的な規範の侵犯、価値の欠如・逸脱・欠乏と同一視する。
3. 古い文献では、*yavana* は、他者グループ(部族、種族)のひと

つとして現れるが、mleccha は、全くの他者性と排除のうちにある異人そのものとして表象される。

4. yavana は、異人ではあるが、インドにおいて、少なくとも辺境では、その存在を認知されたもの（「市民権を与えられた者」）となっている。そして、ヒンドウ的な伝統の一部となっている。それゆえ、早くから、彼らは起源的には、カースト制度に由来して説明されてきたし、混合カーストあるいは墮落クシャトリアとして説明されてきた。

この両語・概念に加えて、śūdra（シュードラ）という、カースト制度内の「異人」を並べてみれば、同じように〈異〉意識を反映した語・概念であっても、異化の度合いの違いがそこには見えてくる。異化の強度は〈自〉意識の中心にあるものとの距離に比例すると言えるだろうが、Halbfass は、この中心にあるものとして4つの規範を想定している。

1. 地理的中心としての「パーラタ」（ちょうど「やまと」にあたるようなインドの古称）
2. 神聖なる言語としての「サンスクリット」
3. 社会的規範としての「ダルマ＝ヴァルナ体制」
4. 〈浄〉の観念である。

そして、śūdra が体制内「異人」であり、yavana が、結果的に体制内に取り込まれた「異人」であるのに対して、mleccha は、「排除される者」としてさえダルマの体制を受け入れることのない、「全き他者」として、それゆえブラーフマナ（バラモン）の世界にとっては、全く交流不可能な者として観念されているということが言えるのである。つまり、mleccha（「ムレッチャ」）とは、インド世界の外部におかれ、サンスクリット（言語）を解さず（解すに値しない）と思われ、社会的・宗教的枠組みの外部に位置づけられる存在ということが言えるのである。

高名なフランス人仏教学者であったシルヴァン・レヴィ（1863-1935）は、ネパールでの調査の際、シヴァ神の寺院に入ろうとして遮られた。その寺院の中庭には先に犬が入ってうずくまっていたののである。（犬は動物の中では最下層に位置する。）「犬は犬である。おまえはいわばムレッチャである」と言われたと、彼は記録している。

オンライン共同研究支援システムに関する検討
山田 篤(京都高度技術研究所情報メディア研究室長)

オンライン共同研究の推進には、研究者同士が意見を交換できるような仕組みと、意見交換の結果作成された研究成果を公刊する仕組みが必要となる。そこで、これまでに述べたウェブアプリケーションを拡張して、複数の研究者が同一のドラフトに対してネットワークを介して互いに意見・注釈をつけ、その結果を互いに参照することができるような仕組みについて検討を行った。

この場合、次の3種類のユーザが生じる。

- a) 管理者：ドラフトの登録その他システムの管理を行う。
- b) 共同研究者：登録されたドラフト、他の研究者の意見等に対して自分の意見を書き込む。
- c) 閲覧者：ドラフト、意見の閲覧のみ。

場合によっては、参加者全員がb)に属し、c)が存在しないこともある。このうち、a)とc)は今までに述べてきたウェブアプリケーションで実現できるため、新たに生じたb)に対して更に検討を加える。

ウェブ上における意見交換システムとしては掲示板システムや、最近ではWiki等のシステムがある。掲示板ではスレッドを使って一連の議論の流れを作ることはできる。スレッドのルートとしてドラフトを設定すれば、要請を擬似的に実現することは可能と考えられるが、スレッドの動的な形成は難しく、単一の見方しかできなくなる可能性がある。議論の流れを様々な形で見ようとすると、各自の意見を個々に格納しておき、必要に応じて表示対象や表示形式を決めるといった動的な編成が必要になると考えられる。動的な編成を考えると、XLink (<http://www.w3.org/XML/Linking>)等のロケーションモデルを用いて、それが何に対する意見かといった情報を個別に持つほうが都合がよい。

また、電子データの印刷出力にあたっては、単独著作として自分が執筆した部分のみを取り出す場合と、共同著作として複数の研究者の執筆部分を取り出す場合が考えられる。更に編集著作の場合はこの後に編集作業が入る。これらの場合もドラフトに対して特定の研究者の意見のみを取り出したり、ある話題に対する複数の意見を取り出すといった任意

の見方を導入できるようにするためには、それぞれの意見が独立に操作できることが望ましい。

このために、はじめに設計したXML DTDではコメントは管理者のみが記入できるものとしていたが、これを任意の共同研究者が自らの意見を記述できるようにするとともに、ドラフトのXML文書とは別に管理し、「誰」が「何」に対して付与したコメントかを管理することとする。

共同研究者が意見を書き込む際の処理の流れは次のようになる。

- 1) 意見を付与する対照となるドラフト、ないし他者の意見を選択する。
- 2) 自分の意見を書き込む。
- 3) 入力された意見が、1) で選択された場所を示す情報、及び入力者、入力日時の情報とともにXML DBに格納される。

閲覧の際にはドラフトを元にした表示、研究者毎の表示といった様々な見方が可能となるようにする。これらに共通した処理の流れは次のようになる。

- 1) ユーザがどのような見方をしたいかを選択する。
- 2) XML DBから関連する文書(ドラフト、意見)が検索される。
- 3) 検索された文書群から表示イメージを構成される。

ウェブアプリケーションの場合、ここで構成される表示イメージはHTMLベースで、ボタン等のインタフェースを用いてインタラクティブに動作させることもできる。

印刷物の生成の場合も処理の流れは同様で、3)において構成される表示イメージが、検索されたコンテンツをすべて含んだページイメージとなる。

ここで示したオンライン共同研究支援システムは先に述べたウェブアプリケーションシステム上に実装することができる。今後は表示方法の更なる改善を行うとともに、FOP (<http://xml.apache.org/fop/>) 等のXSL処理系を用いた印刷イメージの直接生成にも取り組みたい。

2. 第2回研究会報告(要旨)

VAADA第2回研究会は、2003年3月8日(土曜日)に、京都大学文学部にて開催されました。Doxographyをめぐって、京都大学大学院文学研究科・御牧教授より、チベットの宗義文献について、また、研究会リ

ーダーの赤松教授より、インドの綱要書について研究発表が行われました。また、山田篤氏より、研究会のオンラインシステム構築についての報告がありました。各発表者・報告者による具体的な内容は以下の通りです。

チベット宗義文献について

御牧克己 (京都大学大学院文学研究科・教授)

諸学派の論争を低次元から高次元への<異>意識の克服と統合ととらえ、古代インドにおける<異>意識の問題を探る格好の材料の一つとしてチベット宗義文献を取り上げることを提案したい。今回はその初回であるので全般的に簡単な見取り図のみを示しておきたい。

チベット宗義文献にはトゥカン三世ロブサン・チョキニマ(1737-1802)の『宗義の水晶鏡』に代表されるようなチベットの諸宗派の立場を解説したものとインドの諸学派の立場を叙述したものと二種類が知られているが、本研究会に於いて取り上げるのは后者である。

後者のチベット宗義文献は所謂「仏教四大学派」- 毘婆沙師(説一切有部)・経量部・瑜伽行唯識学派・中観派-の思想的立場の解説が中心となっており、外界实在論から外界非实在論へ、無形象知識論から有形象知識論を経て空の思想へ登りつめるというプロセスをとっている。そしてこのプロセスはまたそのままある種の瞑想の階梯ともなっている。

この種の宗義文献が注目されるに至った最初はロシアの碩学ワシリエフの後期仏教史の明瞭な記述であった。ロシア語原文の彼の書物は A. Schiefner による独訳(Wassilief, W., *Der Buddhismus, seine Dogmen, Geschichte und Literatur*, St. Petersburg, 1860)と G. La Comme による仏訳(Vassilief, V., *Le bouddhisme, ses dogmes, son histoire et sa littérature*, Paris, 1865.)とによってもっぱら流布していたが、ダルマキールティやジュニャーナガルヴァやシャーンタラクシタといった後期仏教の巨匠の思想のまだほとんど解明されていない時代になされた彼の明解な叙述に我々は目を見張ったものである。結局彼の記述はジャムヤンシェツパ(1648-1722)の『大宗義書』(Grub mtha' chen mo)に依っているものであることが解ったが、その『大宗義書』

もどうすれば参照出来るのかもよく解らないような時代であった。その後それ以外にも多くの宗義書が存在することが解り現在に至っている。

チベット宗義文献は(1) 仏教四大学派の思想だけを述べたもの、が中心となるが、その他に、(2) 外教の諸学派の思想を述べて次いで仏教四大学派の思想を述べたもの、(3) 仏教四大学派の思想に続いて密教の諸派の立場を述べたもの、(4) 密教の諸派の立場だけを述べたもの、の四種類が知られている。本研究会ではインド部門で重点的に取り扱うハリバドラの『六派哲学集成』との対比の上で(2)の文献を中心に解明していきたいと思っている。夥しい数の文献が存在するが、その紹介は指数が許さないため参考文献表の拙稿に譲る。中でもいろいろな意味で特に興味深い14世紀のウパロサルUparasaraの宗義書は次のような章構成になっている。

- 1) 要約
- 2) 中程度の要約
- 3) 順世外道 (Lokāyata / 'Jig rten rgyaṅphan pa)
- 4) 数論派 (Sāṅkhya / Graṅs can pa)
- 5) シヴァ派 (Śaiva / dBaṅ phyug pa)
- 6) ヴィシュヌ派 (Vaiṣṇava / Khyab 'jug pa)
- 7) ジャイナ (Digambara / gCer bu pa)
- 8) 十八部派 (sDe pa bco brgyad)
- 9) 毘婆沙師 (Vaibhāṣika / Bye brag tu smra ba)
- 10) 経量部 (Sautrānika / mDo sde pa)
- 11) 瑜伽行唯識学派 (Yogācāra-Vijñānavādin / Sems tsam pa)
- 12) 中観派 (Mādhyamika / dBu ma pa) , fol. 96a5-113a3
- 13) 道 (lam) と果 ('bras bu)

その他の類似の宗義書との対比の上で、仏教章ばかりでなく外教章の解明にも重点的に力を注ぎたい。成果刊行のモデルとしては参考文献e)に挙げたようなものを考えている。

[参考文献]

- a) *Blo gsal grub mtha'*, chapitres IX (Vaibhāṣika) et XI (Yogācāra) édité, et chapitre XII (Mādhyamika) édité et traduit, Zinbun Kagaku Kenkyūsho, Kyoto University, Kyoto, 1982.

- b) 「Blo gsal grub mtha' について」, 『密教学』第15号, 1978, pp. 95 - 111.
- c) 「チベットにおける宗義文献(学説綱要書)の問題」, 『東洋学術研究』第21巻第2号, 1982, pp. 179 - 192.
- d) 「チベット大蔵経と蔵外文献」, 『「古典学の再構築」第I期研究成果報告』, 2001, pp. 50-55.
- e) K. Mimaki et A. Akamatsu, La philosophie des Saiva vue par un auteur tibétain du 14^e siècle, *Mélanges chinois et bouddhique*, volume d'hommage offert au Prof. R.A. Stein, Bruxelles, 1985, pp.746-772.

オンライン共同研究システム構築に向けて

山田 篤(京都高度技術研究所情報メディア研究室長)

オンライン共同研究システムに関する検討を行うにあたり、まず既存の代表的なオンラインシステムを概観する。

- (1) ウェブページ : 元々静的なもので、一方的な情報の提供、公開に適する。更新は管理者によって行われる。
- (2) 電子mail : 送信者から受信者への情報発信であるが、「返信」を相互に繰り返すことにより双方向のやり取りを実現する。その際に相手の発言を「引用」することができる。基本的に非同期なため、相手がいつ読むかはわからない。この受信者を複数にしたものがmailing listである。また、mailing listを用いてリアルタイムにやり取りすることにより、擬似的に会議を実現することもできる。
- (3) 掲示板 : 参加者による発言の書き込みが非同期に行われる。関連する書き込みはスレッドを形成する。これは多くの場合、木構造となる。
- (4) チャット : リアルタイムに発言を書き込む。発言は時間順に並ぶのみで、相互の関係に基づく構造化はなされない。

これらは、誰が(情報の発信者) いつ(時間的制約) どこで(空間的制約) 誰に対して(情報の受信者) 何を(発信内容) 伝えたいかによって、その得失を判断すべきである。たとえば、ネットワークを使えば、空間的な制約からはある程度開放される。また非同期方式にすれば

時間的な制約からも解放されうるだろう。

オンラインでの議論のプロセスでは、対象の確定と情報の取得、意見の交換、結果の公開というサイクルを繰り返すことが重要であると考えられる。前回紹介したシステムでは、議論する対象としては、電子的なドラフト（原本）を予め準備し、参加者がドラフトの各パートにコメント（訳注等）をつけていくことで意見交換を行うというものであった。参加者はドラフトと、その時点でつけられているコメントを閲覧することができる。

このとき、原本となるテキストを電子化するにあたり、どのように構造化するかという問題がある。大別して記述内容の論理構造（言語的な単位）をもとにする方法と底本とした文献の構造（ページ割付等）による方法がある。こうして構造化された単位毎にコメントをつけていくことになる。ある単位に含まれる語句等、この単位より更に細かな対象を指定する場合は、XPointerで採用されているようなロケーションモデルが必要になる。またその指定方法も、伝統的な出版物で多く採用されているような一点指定方式と、ウェブドキュメントのリンクのように範囲を指定する方式がある。

さらに、ドラフトのあるパートに不与されたコメントは時間順に表示されればよいのか、コメントに対するコメントといったコメント相互の関連を示す必要があるのか、一旦不与されたコメントを修正することは許されるかといった点を明らかにした上でシステム設計を行う必要がある。

ハリバドラ作『シャッド・ダルシャナ・サムッチャヤ』について
 - インドにおけるDoxography史の観点から -
 赤松明彦（京都大学大学院文学研究科・教授）

1. はじめに

VAADA研究会では、メーリングリストとWebを利用したオンライン研究会の構築を目指しています。インド学のような文献学を基礎にした研究分野での共同研究においては、テーマを立てた研究発表のほかに、テキスト研究を中心にした「読書会」形式の共同研究を実施することが

必要です。しかしその一方で、テキスト研究は強靱な忍耐と精緻な考察が必要とされる極めて個人的な営みでもあります。個人研究と共同研究を「文献学」においていかにして実現するか。これが、われわれの研究会の課題でもあるのですが、それを実現する方法として、われわれはオンライン研究会の構築を模索し始めました。課題となっているテキストについて、メンバーは各自、本文を校訂したり、翻訳読解したり、注記を行ったりします。これは個人が机の上で通常行っている作業です。この作業にパーソナル・コンピュータを利用することは、もはやどのような学問分野でもほとんど常識的なことでしょう。個人研究の場合ならその成果は完成体の論文となって雑誌に発表されことになりますが、ここでは、そのような作業過程そのものを共同討議・研究の場へとそのままオープンにすること、そして様々な議論を経た上の共同研究の成果を、研究者ならだれもが共有できる基礎的情報(データベース)として公開することを目指しています。

このような共同研究形態をとろうとする場合、研究対象としてどのようなテキストを選ぶかは重要な課題となります。専門性が高い特殊な文献は、個人研究者の能力と専門的知識に負うところが大きいでしょうから選ぶことは出来ません。そこでわれわれは、通常は「綱要書」として位置づけられるテキストを選ぶことにしました。インドには、諸々の哲学的伝統(学派)の教説について、「教理誌」(Doxography)的に叙述する伝統があります。そこでは、個人の思想が哲学的教説としてどのように歴史的に展開し、受け継がれ、批判されたかといった観点や、具体的人物の生涯あるいは作品などを概観することに対する関心は、全く欠如しています。個人ではなく学派の教説が主題となり、それらが時に歴史性を無視して提示されます。そして各学派の教説を相互連関的に叙述することに特に重大な関心が払われます。このような性格のテキストを真に読解しようとするならば、様々な関心領域と専門性をもつ多くの研究者の協力が必要不可欠です。単独ではおそらくこのようなテキストを完全に読解することは不可能でしょう。これを研究対象とすることは、われわれのVAADA研究会にうってつけのものであります。そこで、研究対象となるテキストとして、8～9世紀に活躍したジャイナ教の大思想家ハリパドラ(Haribhadrasūri)が作った『六つの見解の集成』(Ṣaḍdarśanasamuccaya)と、その注釈書である14世紀グナラトナ

(Gūṇaratna) の『論理の秘密の解明』(Tarkarahasyadīpikā) を選定しました。ハリバドラのこの作品は、「教理誌」の中で最も古いものと考えられています。

2. ハリバドラと『六つの見解の集成』について

ハリバドラは、ジャイナ教白衣派に属する8~9世紀に活躍した思想家・詩人・論争家です。ジャイナ教の伝統では、その生涯において1400もの著作を残したと伝説的に語られています。ハリバドラという名の思想家が果たしてひとりであったのか、あるいは複数いたのかは研究の上では問題になるところですが、ハリバドラに帰せられるテキストで現存するものだけでも90近くあるということです。(ハリバドラについては、次の二つの論文があります。

- 1) Olle Qvarnström: Haribhadra and the Beginnings of Doxography in India, in N.K. Wagle and Olle Qvarnström, *Approaches to Jaina Studies: Philosophy, Logic, Rituals and Symbols*, pp.169 - 210, Toronto 1999.
- 2) Phyllis Granoff: Jain Lives of Haribhadra: An Inquiry into the Sources and Logic of the Legends, *Journal of Indian Philosophy* 17, pp.105 - 128, 1989.

ハリバドラの主著としては、『多面的見解の勝利の旗』(Anekānta-jayapatākā) を挙げることができます。「多面的見解」(anekānta-vāda) とは、ジャイナ教の哲学の中心にある考え方です。「一方的な理論を立てず、自派、他派を問わず、あらゆる観点を等しく認めて偏見をもたない」という彼らの思想的態度を表しています。ハリバドラ自身は、これを、saṃhāra-vāda (融合論) とか saṃkīrṇa-vāda (混合論) と言い換えています。それは相対立する哲学的諸見解を統合しようとする立場であるということができます。このことは、単に彼らが相対論に立っていたということだけを意味するものではありません。彼らの主張の形式が「AはBである」というカテゴリー命題、つまりドグマの提示ではなく、「もしpという観点から見れば、AはBである」というコンディショナルな命題の形をとるということの意味をしています。ジャイナ教の術語で言えば、Syād-vāda です。この立場は、ジャイナ教では認識論においても論理学においても貫かれますから、仏教も含めて他学派が

常に本質論的な議論をするのと異なり、独自の考え方を展開することになりました。とりわけ論理学においては、(存在論的な必然性の問題ではなく)命題の理論としてそれを取り扱うという可能性をインド論理学史上に開いたものとして高く評価しなければならないと思います。われわれの研究会が研究対象とする『六つの見解の集成』もまた、そのような立場から当時の哲学諸学派の教説を概観しようとしたテキストということができます。

3. 『六つの見解の集成』の内容 - 『全哲学綱要』との比較

『六つの見解の集成』は、次のような構成になっています。

- (1) 序論と仏教学説の章、
- (2) ニヤーヤ学説の章、
- (3) サーンキヤ学説の章、
- (4) ジャイナ学説の章、
- (5) ヴァイシェーシカ学説の章、
- (6) ミーマーンサー学説の章、
- (7) ローカーヤタ学説の章。

「六つの見解」といいながら七学説によって構成されているのは奇妙ですが、帰敬の詩節に続く冒頭の詩節では、ローカーヤタを除いた六つを数えています。ハリバドラは、各学派が信仰の対象としている「神格」(devatā)の区別に基づいて、学派を区別したと言っていますから、無神論のローカーヤタは別扱いになっているのだと思われます。

いま、この構成を、同じくインドの哲学綱要書として有名な『全哲学綱要』(Sarvadarśanasamgraha)と比較してみます。『全哲学綱要』は、ヴェーダーンタ学派不二一元論派の14世紀の思想家マードヴァ(Mādhava)が著したものです。その構成は、

- (1) チャールヴァーカー説 (= ローカーヤタ説、唯物論)
- (2) 仏教説、
- (3) ジャイナ教説、
- (4) ラーマーヌジャ説、
- (5) マドヴァ説、
- (6) ナクリーシャのパーシュパタ派説、

- (7) 南インドのシヴァ教説、
 - (8) カシミールのシヴァ派説、
 - (9) 水銀派説、
 - (10) ヴァイシェーシカ説、
 - (11) ニヤーヤ説、
 - (12) ミーマンサー説、
 - (13) 文法学派説、
 - (14) サーンキヤ説、
 - (15) ヨーガ説、
 - (16) 不二一元論ヴェーダーンタ説、
- となっています。

両者の構成を比較して気がつくのは、後者が自派を最後におくのに、前者はそうではなくローカーヤタ学説を最後におくこと。また、前者では、ヴェーダーンタ学説が独立した学説として論じられないということです。実を言いますと、インド文献史の中で、「教理誌」(Doxography)というジャンル名で取り上げることのできるテキストのほとんどは、ジャイナ教かヴェーダーンタ学派のいずれかの学派の内部で作られた「綱要書」です。そして、上にあげた特徴は、それぞれの学派の「綱要書」のほぼ全てのテキストに当てはまるものです。それぞれは、ともに包括論的にすべての学説・教説を含みこもうとするものですが、ヴェーダーンタ学派の方は、自派の不二一元論を最高の到達点において、他の教説をそこに至る通過点のように扱う<垂直的視線>をもつものに対して、ジャイナ教の方は、すべての見解を平等に<水平的視線>で捉えていると一般的に言われています。しかし、ジャイナ教のテキストが、なぜヴェーダーンタ学派を独立した学説として扱っていないのかについては疑問が残ります。この点については、グナラトナの註釈も含めて今後読み進めていく中で、ヴェーダーンタ思想がどのような形で言及されるか、あるいは言及されないのか - 「神格」を問題にする限り、「ブラフマン」に言及しないわけにはいかないとおもいますが - を注意深く見ることによって、明らかにしていきたいとおもいます。

3. 第1回国際研究集会における講演発表(要旨)

2003年6月7日(土曜日)に、京都大学招聘外国人学者として来日中のH. Krasser博士(オーストリア科学アカデミー研究員)とVAADA研究会にて招聘致しましたH. Isaacson博士(ペンシルバニア大学・助教授:両博士ともVAADA研究会のメンバー)の講演を中心に、第1回国際研究集会を開催しました(英語使用)。同研究集会には、本研究会メンバーだけでなく、各大学の研究者の方々にもお忙しい中遠方より多数ご出席いただき、活発な議論が展開されました。両博士の研究集会における発表の要旨は、以下の通りです。

Harunaga Isaacson博士(発表要旨)

“sarvaḥsamānaḥ pravibhajyamānaḥ ...”: Buddhist, Śaiva, and modern views on difference and affinity between Buddhist and Śaiva tantra

The question of the relationship between Buddhist and Śaiva tantra, two areas of Indian religion which quite obviously have many similarities, has long been a much disputed one. Both of these fields being vast and difficult ones, it is likely to remain so for a long while yet. It is also a somewhat controversial topic, which can be tied up with the question of whether (or to what extent) Buddhist tantra is Buddhist, and even to what extent Buddhist tantra is ‘legitimate’. Our knowledge of both tantric Buddhism and Śaivism has, however, steadily improved, and the present paper attempts something of an interim survey. On the basis mainly of (a selection of) textual evidence, the question of this relationship will be considered from three viewpoints: that of late Indian tantric Buddhists, that of Śaivas, and that of contemporary (especially Western) scholarship.

Helmut Krasser博士（発表要旨）**Are Buddhist Pramāṇavādins non-Buddhistic?**

Starting from the statement by Theodor Stcherbatsky in his *Buddhist Logic*, that according to Sa skya Paṇḍita (1182-1251) “logic is an utterly profane science, containing nothing Buddhistic at all, just as medicine and mathematics”, this contribution aims at solving the problem “caused” by the fact that, for example, Sa skya pa scholars regarded the texts of the Buddhist logical school as constituting from among the five classical *vidyāsthānas* the field or branch of epistemology (*hetuvidyā*) alone, but did not classify them as belonging also to the “inner” science (*ādhyātmavidyā*), the Buddhist soteriology proper. Does this fact allow for a classification of *pramāṇavāda* as “non-Buddhistic”? In search for an answer relevant passages from the works of 'Bri guñ'Jig rten mgon po (1143-1217), bCom ldan rig pa'i ral gri (1230?-1315?), Bu ston Rin chen grub (1290-1364), sTag tshañ Lotsāba Śes rab rin chen (1405-?) as well as Sa skya Paṇḍita (1182-1251) will be viewed with respect to these author's understanding of *pramāṇa*, its interpretation by modern scholars (Leonard van der Kuijp, David Jackson) as well as possible Indian forerunners or sources. From among the Indian Buddhist scholars the interpretations of Dignāga, Kamalaśīla and Prajñākara Gupta regarding a possible value of *pramāṇa* in a wider Buddhist context will be considered.

4．第3回研究会（読書会形式）

2003年5月16日から6月13日までの約一ヶ月間に渡り、毎週金曜日、ペンシルバニア大学のアイザクソン博士による読書会（英語使用）を第3回研究会として以下のとおりのスケジュールにて行いました。読書会に使用されたテキストは、10世紀のはじめ頃活躍した哲学者ジャヤンタの作った古典インド哲学劇『アーガマ・ダンバラ』です。

5月16日（金）第1回：アイザクソン博士によるテキスト・写本について

での説明のあと、序幕を輪読して終了しました。

5月23日(金)第2回:第一幕「仏教」の場面の前半(比丘退場まで)を読みました。

5月30日(金)第3回:第一幕「仏教」の場面、中ほど(14頁中段まで)を読みました。

6月06日(金)第4回:第一幕「仏教」の場面の後半(残り全部)を読みました。審判が登場。仏教者とバラモンとの論争。わずか数詩節で、四諦から唯識、そして「一切空」までを断じます。

6月13日(金)第5回:第三幕「チャールヴァーカ」の場面(後半、論争の場面)を読みました。

今後の活動

研究会で取り扱うハリバドラの『六派哲学集成』の序章部分については、既に公開され、準備段階としてメーリングリストによる国際共同研究(英語使用)を始めていますが、それをベースに、オンライン共同研究システムが近日中に本格的に立ち上がるようになっております。

また、H・クラッサー博士とH・アイザクソン博士が来日され研究会に参加された旨、本報告書に記載しましたが、この他、本年度後半には本研究会のメンバーであるA・アクルチカル博士(ブリティッシュ・コロンビア大学教授)とA・ヴェツラー博士(ハンブルク大学教授)が来日され、研究会に参加される予定になっております。

10月から京都大学客員教授として来校されるA・アクルチカル教授を中心に、10月11日から毎週土曜日の午後、離日まで約二ヶ月に渡って共同研究会を連続的に開催する予定にしております。

また、アクルチカル教授の講演を中心とした第2回国際研究集会を教授の滞在中に開催する予定にしております。

国際的に第一線で活躍する研究者や第一人者との共同研究を活発に行い、そこに大学院生をも多数参加させることによって、COEプログラムに相応しいプロジェクトを展開していきたいと思っております。